普段着のわたしたち

長梅雨のせいで我が家の柿の実はボタボタと落下。連日拾っては捨て拾っては捨て。とうとう八月半ばには全滅。無念…。今年はナリ年だったのに。ウチの柿が大好きなのに（涙）。

そして何故か裏庭のキウイが豊作。植えてからこれほど実ったのは初めてです。

母がせっせと追熟させて、毎日食べているようです。

免疫力向上食品と評判らしいので、母なりの「コロナ対策」の１つなのだとか。

訶梨帝母

カーマホームセンターで発見した作業用のガーデンブーツ。これがなかなか具合が良くて気に入っています。

前は長靴で水仕事をしていましたが、長靴は歩きにくく、しゃがみにくいのです。これなら防水で動きやすく大変便利です。

征阿

「わ～ぃ、やっとお盆が終わった！　住職のヤツ、この夏はコロナ封じとかでさんざんこき使いやがって！　地蔵盆で地蔵が出て行ったテントの中に隠れて涅槃像のふりしてお昼寝しようっと。」（佛談）

俊徳丸のお寺の本堂には、佛菩薩方が避難休息するテントが設置されています。佛界でも「働き方改革」が囁かれて久しい折。このたび有頂天大臣から俊徳丸が訴えられました。その対策として設置されたもようです。安上がりにすませたようです。更に「お昼寝ブッダに会いに行こう！」と山門の掲示板に書かれていました。　ご存じ

モネの楽しみの万分の一に触れてみたいと、睡蓮の栽培を始めて３年目です。

今年は 80 リットル入りの桶２つに６鉢ずつ入れてみました。花付きは上々。

いつの間にかトノサマガエルが１匹棲みついたようです。最初は近づくとボチャッと音がするだけでしたが、或る日の夕暮れ、目が合ったのです。「家賃は負けとくからな、ボウフラを食べてくれよ」　迷走坊

『友引町内会通信』はパソコンやタブレットでもお読みいただけます。検索は http://www.daigoji-temple.jp/　「友引町内会通信」をクリックしてください。寺務局

平成十二年九月十一日～十二日。我が地区で東海豪雨なる災害がありました。ちょうど二十年前の出来事です。

自坊は浸水等の被害もなく、大いに庭が荒れた程度。しかし私個人的には手痛い被害を受けました。

九月十一日、その日は年に一度の社中演奏会。終演間近の夕方頃から猛烈な豪雨と雷。終演後の宴も早々に切り上げ、電車が不通にならないうちにとっとと帰宅。「バケツをひっくり返した様な雨ってこういうこと。しかもかなり長時間・・・」と思い、不安な一夜を過ごしました。

翌朝、東海地区のあちこちで浸水という報道。その中にはなんと、師匠の住所も。生徒間ですぐに連絡を取り合いましたが、師匠とは全く連絡が取れず、繋がったのは三日後でした。水が引いたと聞き、社中総動員で掃除の手伝いに行きましたが、稽古に通う見慣れた景色は、泥土色に一変していました。

さて、私の受けた被害とは。

演奏会の際、三絃は当日自分たちで持ち帰りするのですが、箏は楽器屋さん任せ。最終の申し合わせ後、楽器屋さんに預け、演奏会終了の後、次回お稽古に行った際引き上げてくるという流れ。そう！なんとその豪雨の晩、浸水した師匠の家に箏たちはいたのです。それも演奏会用の一番上等な子が・・・。（涙）

こもりうた68

師匠の話によれば、近くの川が決壊したと聞き、マズイと思いすぐに箏の絃を全て切った（そのまま水に浸かった場合、絃のテンションで楽器自体が反ってしまうから）。そうしているうちに一階が浸水して二階へ上がり、防災ボートで救助された、と。我々の楽器は二日間、泥と汚水に浸かったそうです。「皆さん大変な被害を受けて、我々はたかが楽器ではないか。師匠が必死で絃だけ切ってくれて、それだけでも申し訳ない。諸行無常・・・」。と思いつ

つ、暫くはかなり凹んでおりました。

数ヶ月後、箏医のお力で美しい顔に戻った我が大切な娘。しかし、全く元通りとは行かず、毎年その時期になると合同稽古で交わされる会話は、

「またこの梅雨に虫がわいた～」

「今年は出てこなかったけど、ちょっとカビが・・・」だの。もう今や風物詩。笑い話にして皆で盛り上がっています。箏なんて木をくりぬいて絃を張っただけかと思いきや、意外とデリケートでした。

幸い私の楽器はカビや虫の後遺症無し。故に、その話題になると声やや小さめ。弾くと虫が出てくる箏、シュールだわ～。

ところで、先日、盆のお墓参りで市の墓地に出かけました際、待機場所の東屋に蜂が巣を作りかけていました。こんな建物の中に作るなんて、この秋はまた大きな台風でも来るのでは、と心配しております。ご用心。

訶梨帝母

習近平は良い人デス（汗）

私は 20 歳代最後の年に西ドイツを旅行しました。スパイ映画に出てくる冷たい日の曇天のような東ベルリンを見てみたいのが私の夢でした。今から思うと米ソ冷戦時代の終末をこれから迎えようとしていた頃です。しかしそんな大事件が数年後に訪れるなどと世の中の誰が思っていたことでしょう。

現地で知り合った男性は奥さんが日本人で日本語を話すことができる人でした。彼に、「ドイツが再び一つの国になる日が来ると思いますか？」と尋ねてみました。すると彼は、「そんな夢のような事、絶対にあり得ない！」と力を込めて答えたことがとても印象に残りました。世界の大きな変動は、案外静かに前触れもなくやってきて大河の流れのようにすべてを飲み込んでいくように、「ベルリンの壁の崩壊」をテレビで見てそう印象に残りました。

私が生まれて初めて海外旅行を経験したのは 19 歳の時 1979 年の 12 月でした。行先は中国で、暗黒の時代「文化大革命」が終わって 4 年経過した時です。当時の中国は誰もが自由に渡航できず、「佛教友好団」の一員として参加し、日中友好のために組まれた小学校等の施設へも否応なしに訪問しなければなりませんでした。現地の佛教寺院へは崖を含む山道を 1 時間以上歩きました。荒れ放題で、お堂の中の石畳には秋に収穫された豆が一面に干してあるという有様でした。もちろんお寺としての活動は全くなされていない状態でした。街中の様子も現在の中国とは全く似つかないものです。北京でさえも自動車など滅多に見ることなく、人民服姿の人が乗るおびただしい数の自転車が往来していました。

海外の旅行者は現地の人に接することは全く許されず、常に当局の通訳と一緒でなければ行動できません。すれ違う人は皆無言で決して目を合わせることはなく、その目線からは測りきれない険しさのようなものを感じました。現在のようなけたたましく会話している中国の人と比べるととても同じ国の人とは思えません。他人から何事も悟られまいとしているその振る舞い。多くの人命をうばった文化大革命がどれほどのものか想像できます。

旅行中、北京の公園を歩いていた時に通訳の男性が話しかけてきました。二人きりです。高倉健さん似のがっしりした人です。彼は中国ではエリートだと思いました。…「3 日前に北京の公園の凍った池での出来事です。小学校の女性教師がスケートの授業をしていました。すると氷が割れて女の子が池に落ちました。あっという間に教師の周りに人だかりが出来て大声で救助に対する報酬の値段交渉が始まりました。女の子を助ける者は皆無でその交渉の間に女の子は犠牲になりました。我が国はそういう人民の集まりなのです。将来隣国のあなた方の「脅威」になることを決して忘れないでください」と彼は告げました。この旅行で一番印象に残り、私は生涯忘れることはないでしょう。

8 月 15 日、原稿の締め切日。お盆が終わり必死で原稿を書き、これから迷走坊さんにメールで送信します。ひょっとしたら中国共産党がこのメールを傍受して、私と迷走坊さんは中国の悪口を書いた罪で、「国家安全維持法」により犯人引渡し条約のない韓国ソウルあたりで数年後に逮捕されるかも知れません。他人事ではありません。特に「習近平の大バカ」などと書いたり言わないでください。中国の「国家最重要機密」らしいですから。　俊徳丸

『私説法然伝』（６８）

往生する人たち④

先月号では比叡山延暦寺と法然上人の当時の立場について書きました。今月号はその続きについて書きます。

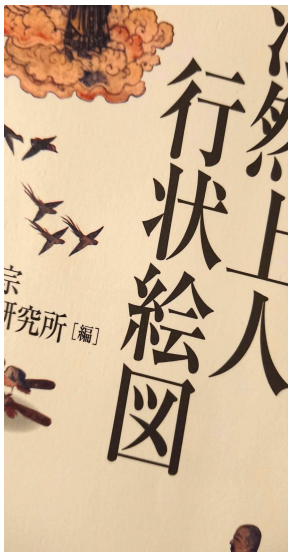
【法然上人が吉水の地に庵を作られた根本的な理由は完全に不明であるし、どのような形で生活を成り立たせていたのかも不明ではある。状況から推測すると、権門という「総合商社」から「給与所得」を得るという事はなく、やはり自活されていたのであろう。しかし「肩書」はそのままであった。これが今後の法然上人の人生並びに法然上人門下の人々の事を考える上で重要な点となる。

ここで一度法然上人が比叡山延暦寺を降りられた後の足跡を振りかえると、承安（じょうあん）五年（一一七五年）法然上人四十三歳の時に黒谷から西山広谷（現在の総本山光明寺）へ移り、高橋茂右衛門と再会し、遊蓮房と念佛の日々を送られる。治承元年（一一七七年）に遊蓮房が往生し、その後吉水の地へと移り住む。そして戦乱と飢饉と大火と疫病と地震の時代へと突入していく。混乱期は建久（けんきゅう）元年（一一九〇年）法然上人五十八歳の時まで続くのである。

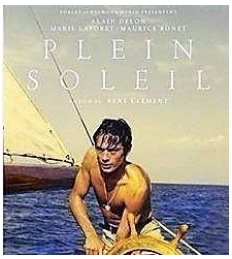
治承元年から建久元年までのおおよそ十三年間は、念佛の日々であると同時に、法然上人が世間的にその認知を広められた年月でもあった。具体的に何をされていたのかという資料は少ないが、伝記に法然上人の言葉として残されているように、木曽義仲の京都乱入の日以外は「聖教（しょうぎょう）」を観る日々であったと伝えられている。つまり研究活動と言える日々であったとも伺えるのである。経典を読む、つまり読誦（どくじゅ）するとは話されていない。法然上人にとって聖教とは何かという事になるが、伝記などでの法然上人の言葉から推察するに、広く佛典全般を指すと考えられる。状況から考えていくと、おそらくは本願念佛というものを体系的に、または学問的にまとめられていたのではないだろうか？ではなぜそうする必要が有ったのか？という疑問点が浮かび上がる。単純に信仰生活という点で考えれば、お念佛だけの日々で良いわけであるが、聖教を読むという行為には意味があったと考えるべきである。その意味は法然上人が治（じ）承（しょう）元年以後にどのような人々とどのような関わりを持っていたのかを観ていくと、その意味の輪郭が浮かび上がるのではないであろうか。】

法然上人の謎の一つが吉水の地を選ばれた理由です。これは本当に誰も明確に理由がわからないことです。しかし法然上人にとっては吉水の地でなければならなかったのでしょう。法然上人の生まれ故郷にどことなく似た雰囲気があったからではないか？と手前勝手に考えた事もありますが、こればかりはタイムマシーンでもないとわかりません。

以下次号に続く（征阿）



宿題がいっぱい



この夏の宿題には悩まされた。新型コロナウィスル第２波と熱中症への対策等々。まだ正解が見つかりません。

どのお寺も、一人でも多くの参詣者があることを有り難いと思っています。ただ今年の盆施餓鬼では、コロナ感染症対策のために、一家でお参りいただく人数に制限を設けたり接触の時間を減らすなど、多くのお寺が様々な対策を余儀なくされました。参詣者もマスク着用。しかし僧侶もマスクでは、お経の声が通りにくい。改良の余地ありです。

来年の夏までコロナ禍が続くことを想定すると、昔からのやり方へ戻すことは難しい。新しい法式で伝統行事を守る工夫が要ります。

棚経参りは一定期間に全ての檀家さんのお宅を訪問しなければなりません。

goo 天気のデータによりますと、東京、大阪、名古屋の３大都市では 50 年前に比べて最高気温が４度以上上昇しています。地球温暖化に加えて、ヒートアイランド現象が影響しているからです。最高気温が毎年上がり続ける中で何も考えずに同じように棚経参りを続けていては、道端で倒れて干からびる僧侶が続出することでしょう。

トヨタ自動車の「カイゼン」のように、問題を「見える化」し、みんなで改善策を考える。そうして伝統行事を守りたいものです。

コロナ禍については他にも宿題があります。

１つは経済的衰退です。余り報道されませんが、お寺も減収の直撃を受けています。

我が宗では、お勤めの中で「四弘誓願」という偈文を称えます。その最後の２行は、

「自他法界同利益　共生極楽成佛道」

（貴方も私も佛さまから同じようにご利益をいただいています。ですから共に極楽に往生して佛道に励みましょう）

お布施を差し出す側と受け取る側がお互いに拝み合う関係がまだお寺には残っています。そこが商取引とは違う点です。

２つ目は心の衰弱です。「餓鬼の心」が表へ現れる哀しい結果を招いています。見えない、よく解らないウィルスへの怖れ。「死」を身近に感じさせ不安をあおる報道。それらに連日接していると、エゴが膨らみ差別的な言動が現れてきました。医療関係者や感染者への偏見は、俺さえ良ければという餓鬼の心です。「自粛警察」と呼ばれる人たちは、本人は正義のつもりでも、バランス感覚の欠如です。

お寺へ金策に来られても困りますが、佛さまの前へ坐って「ホッ」とする時間をお持ちになりませんか。お医者さんでどうにもならなくなったら、坊さんの出番です。

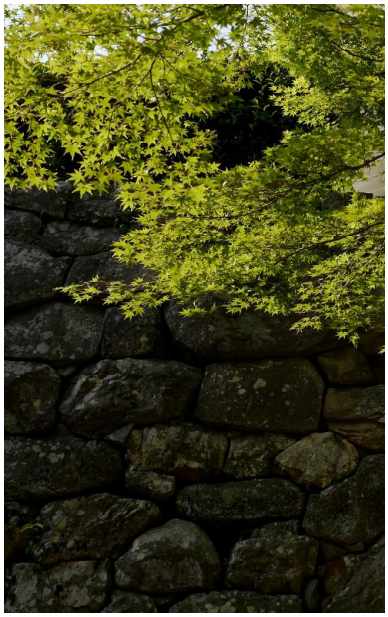
「世の中から求められる存在に生まれ変わる」これがポストコロナのお寺の最重要課題です。正解したお寺だけが 2040 年（３～４割のお寺が消滅すると予想される年）まで存続しているでしょう。

迷走坊

続・観経物語（１５）

観経要讃（十四）

如来はこゝにも彼處にも
お在さぬ處なかりけり
領解の胸のひらけなば
影は直ちに宿るなり。

この観経では、韋提希夫人が釈尊によって欣浄縁というところで、極楽浄土の姿を見せられたそのままを、未来の衆生＝凡夫にも、同じように観る手立て（方法）を、十六の観法として、縷々説き、語られています。韋提希夫人自身は、欣浄縁という場面では「光台現国」といって浄土の全体像を見ており、先月号の「華座観」では、「住立空中」の三尊として、佛のお姿を拝んでいます（いづれも佛力による）。未来の衆生のための「説」としては、これまでに浄土の国土の有り様が説かれ、先月号では佛を観察する方法の第一歩として、佛が座して居わす「華座」の観法が説かれました。そしてますます「華座」の上に座したまう阿弥陀佛を観想する事になりました。では、未来の衆生、つまりは凡夫が一心に思いを致したとして、阿弥陀佛の形や像を想い描くことが出来るでしょうか。これについて経では「汝らよ、心、佛を想う時、この心、すなわちこれ、三十二相八十随形好なればこの心、佛となり（作り）、この心、佛なり。～かの佛を想わん者、まず、まさに像を想うべし」とあり、凡夫であっても、三十二相八十随形好という佛のお姿の特徴を表した決まりごとに添って佛を想う時「心眼、開くことを得て～」とあり、佛の仮の形像、すなわち佛像を想いみれば「もし合することあらば、名づけて、粗想に極楽世界を見るとす」として「生死の罪を徐き、現身の中において、念佛三昧を得ん」とあって、雑念のまま思い描けばそのまま佛と一体になり、罪は除かれ現身のまま南無阿弥陀佛の念佛となれました。凡夫の一念と阿弥陀佛が一になり得て三の境地に至るのでしょうか。経では「もろもろの佛、如来はこれ法界身にして、一切衆生の心想の中に入りたまう～心、佛を想うとき、この心、すなわちこれ～佛を作り、この心、これ佛なり」と述べ、佛や如来はもともと姿や形もなくてあらゆるものや事象に内在する真理そのものであるから、一切の衆生の心の中に入り込んで存在しているのであり、人の心が佛となり、人の心がそのまま佛なのである。だから凡夫が佛を思うとき、その心がそのままに佛の特徴を備えており、佛そのものであるので、人が阿弥陀佛を思うとき佛も人を思い出現されるのです。観経要讃では、阿弥陀佛はそこかしこ、つまり人々の心中に入りたまうから、人が領解の心、他力の信心をえたならば、影すなわち阿弥陀佛は心に宿り、南無阿弥陀になると、この第八形像観をまとめておられます。

《妙星斎》